

歌と写真で綴る薩摩の脇道 — 歌三昧の史跡巡礼, その4-3 —

| | | |
|--------------------|----|----------------|
| キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 粟 | 博志・高田 昌実・萩原 隆二 |
| 鹿児島大学 名誉教授 | 納 | 光弘 |
| 加治木温泉病院 | 夏越 | 祥次 |
| 県立大島病院 | 粟 | 隆志 |

[4] 距第六師団の碑

市立美術館の道路添いの右角に、大きい石碑が建っている。いつもお花が咲いている。正確な碑の内容は分からないが、図のように側面に「距第六師団」「距鹿児島衛戍」...と刻まれている(図166)。

陸軍第6師団は、1872(明治5)年に設置された熊本鎮台を母体に、1888(明治21)年に編成された師団で、鹿児島など九州南部の出身者で編制。衛戍地が熊本である。断定的ではないが、この石碑と衛戍地の行程(五拾参里)を示しているようだが、詳細不明。

[5] 鶴丸城の石垣

孫武は、紀元前五百年頃の中国の軍事思想



図166 「距第六師団の碑」

家である。前出の古代ギリシャのサッフォーの時代に近い。

私は高校の漢文の時間に、彼の兵法を学び、種々の本も読んだ。今思うと、西郷がなぜ、私学校で、これを徹底的に教えていなかったんだろうと、悔やまれる。

彼の思想は、いつの世にも通ずるものがある。

その根本思想は、「兵は詭道なり」で、「百戦百勝は、善の善なるものに非ず...」「国を全うするを上と為し、国を破るは、之に次ぐ」である。

孫子四如の旗と称された旗指物「風林火山」で知られる、甲斐の武田信玄(1521-1573年)は、「人は城 人は石垣 人は堀 情けは味方 仇は敵なり」でも知られる。

孫子は、いつの世にも読まれていた。

戦国時代~江戸初期、江戸末期~明治初期、特に前者に於ては、堀と石垣は城郭の要であり、これにより、国の命運つまり生死が決する可能性が高かった。

石垣の石積みは、戦国時代以降、城郭の発達に伴い、建築技術の重要部門の一つとして、その工法が発達し、^{あのう}穴太衆などの石垣衆と呼ばれる石工集団が活躍した。

280 石達の ジクソーバズルか 石垣は

281 城壁は ^{いにしえびと} 古人の知恵の跡

石積みは、石垣の規模、壁の角度(勾配)、

強度、地盤の状態、耐震性、水はけ、外観、対費用効果、組み方の難易度、用途、予算に応じ決定される。以下その分類を示す。

石の加工程度：簡単なものから、野面積み、^{のづら}打込み接ぎ、^{うちこ}切込み接ぎ

石積みの方法：布積み(整層積み)、乱積み
外観：算木積み(でもある)、谷積み、
亀甲積み、玉積み、笑積み

鶴丸城は、江戸時代の最初期に築城され、石垣も完成型である。

鶴丸城の石垣は、基本的には、個々の石を加工し、すきまなく並べた、「切込み接ぎ」の「布積み」であるが、一部に、「切込み接ぎ」

の「乱積み」も見られる。

図167は、御楼門の左側の壁で、同じような大きさの石を、一段づつ整然と横並びに置く布積みで、特徴となる横目地が通っているのが、よく分かる。

図168は、城山に向かう北門側の石垣で、大小の不整形の石が混在した乱積みである。

以上は、石垣の法面の築石、平石であるが、次に、重要な出隅の隈石(角石)を見る。

図169は、御楼門の左手の隈石である。その特徴的外観から、典型的な算木積みである事が分かる。

算木積みは、1600年以降に普及した方法で、



図167 御楼門の左側の石垣

ほぼ同じ大きさの石を横並びに置く、切込み接ぎの布積み。横目地が通る。



図169 御楼門の左手前の隈石

算木積みである。更に御楼門側には、亀甲積みも認める。



図168 私学校跡に面した堀の石垣

大小の不整の石が混在した切込み接ぎの乱積み。石のジグソーパズル。



図170 御楼門から城内に入る坂道の石垣

隈石は算木積み。整然としているが、壁の水はけが悪く排水口を認める。

長方体の石の長辺と短辺を、交互に重ね合わせる。通常、長辺と短辺を倍以上になるよう加工する。極めて強い強度を得る。

平成28年の熊本地震で、熊本城の飯田丸五階櫓を支えた、右隈の一系列の算木積みは、記憶に新しい。

御楼門の算木積みの右手には、五角形、六角形の亀甲積みが一部にみられる。

亀甲は、八二一カムあるいはベンゼン環のように、安定した六角形であるが、亀甲積みは五角形のものも多い。

図170は、城内に入る登り坂の石垣である。隈石は、算木積みで、周囲の法面は、布積みである。外観は整っているが、すきまが無く、水はけが悪く、排水溝が必要となっている。

重機のない時代に、石を切り出し、運搬・加工し、石を積みあげた人達の努力がしのばれる。

大阪城の多くの巨石は、権威の象徴である。この門の左右、背後の巨石の他、大阪城には、驚くほど多数の大石がある（図171）。

[6] 宝暦治水工事薩摩義士の碑

小学生の時、江戸時代の濃尾平野での氾濫



図171 大阪城の門の両側と背後の巨石

門の中央に天守閣が遠望されるように、計算しつくされて、巨石が配置されている。背後の巨石の位置は、ここしかありえない。前方でも後方でもためである。権力の象徴（中2の修学旅行アルバムより）。

による水害、輪中、水屋、軒下の舟や治水工事のことなど習った。

鹿児島に来て、それが、宝暦の治水工事と知った。その碑が、鶴丸城址の医学部キャンパスに隣接していたからだ。

内堀に沿って城山に向かうと、突き当りの城山登山道の入口階段を登った正面に「宝暦治水工事薩摩義士の碑」はある（図172）。

1753（宝暦3）年、徳川幕府は、外様の有力大名である薩摩藩を警戒し、その経済力を削ぎ、濃尾平野を水害から守るといふ、一石二鳥を目論見、洪水を頻発させていた木曾三川（木曾、揖斐、長良川）の治水工事を命じた。

家老の平田靱負が総奉行となり、約1,000人で現地に赴いたが、難工事、幕府役人の横暴、病気（赤痢）などで、51人が自決、33人が病死、つまり84人ももの死者（死亡率8%は非常な高値であり、戊辰戦争での薩摩藩の死亡率を上まわる）が出た。

また、工費も当初の見積もりを大きく超過し、40万両に達した。

1年3カ月で工事は完了したが、工事終了後、平田は自刃した。

当時は、幕府の力が強かったため、幕府への配慮から、事業の偉業は公表されず、1920



図172 「宝暦治水工事薩摩義士の碑」

城山登山道入口にある。右側の石燈籠には、東郷平八郎の揮毫で「義烈泣鬼神」と刻まれている。



図173 薩摩義士の碑

平田勅負を頂点とする金字塔型の碑。左手に大きい石碑があるが、内容は不詳。



図175

碑の左手前に岐阜県根尾村より寄贈された「淡墨桜」が植樹されている。



図174

頂点の平田の碑の刻名は「平田正輔君」とある。



図176

御楼門建造のため寄贈された、2本の樹齢300年以上の欅の大木。

(大正9)年になって初めて、この地に慰霊碑が建ち讃えられた(図173)。

碑は金字塔形で、前と左右の3面に、各々の名前と没年月日が刻まれている(図173)。

頂点に平田の碑があるが、「平田正輔君」とある(図174)。

これらの碑とは別に、左側に大きい、由来を記したと思われる碑があるが、俄には判読できない。

なお碑に向かう石段の登り口の右側に、大きい石灯笼があり、その右側面に、東郷平八郎の揮毫で「義烈泣鬼神」と刻まれている。

碑の左手前に、平成2年に岐阜県根尾村よ

り寄贈された「淡墨桜」がある(図175)。

更に、御楼門建造に際しては、宝暦治水工事の幕府方の関係者の御子孫の方から、樹齢三百年以上の欅の大木材が贈られている。

樹齢からして、治水工事を見ていたのかもしれない。今は御楼門から、義士の碑を見守っている(図176)。

282 お堀端 歩き来りぬ 目交ひに 義烈の
昔一人しのばむ

283 南風 淡墨桜 咲かしめよ 義烈の思ひ
千代にとどめむ



図177 そほふる雨の中なれど
淡墨桜 今 盛りなり

3月28日、碑を訪れた。あいにくの雨で、桜も散り始めていた。世の常である。

然し、桜は満開で、あたりは、新緑の候、^{たけなわ} 酣である。しばし、ここに居ると、過去と現在^{いま}は重なり、人は自然と一体となる。

284 春雨じゃ 濡れて見に行く 花見かな
(半平太風に)

285 散る桜 風吹かねども 心なく ^{けふ} 今日も
恨みの雨の降りける

286 城山の 義烈の前に匂ひ咲く 淡墨桜
雨に散りつつ

287 春雨に ^{いにし} 古へのこと流れ去り 淡墨桜
爽やかに咲く

288 ^{かたはら} 傍の淡墨桜語るらく 薩摩の地にて古へ
思ほゆ

289 宝曆に治水工事を眺めたる 御門の^{けやき}櫨
義士の碑ながむ

290 ^{ことし} 今年また ^{こよみ} 曆巡りて春は来ぬ ^き
^{やよい} 弥生きたりて ^{いくとせ} 幾年なりぬ

宝曆の過ぎにしことを 思ひ染め
青葉繁れる新緑の ^{たけなわ} 春蘭の城跡^{わた}辺り
^{ただ} 唯一人 義烈の前に佇めば
^{いにし} 古への 恩讐のこと 雨に流れて

厳しき冬を堪へしのび
花 麗しく咲けれども
風吹かば 枝を離れて空^{くう}に舞ひ
雨降らば 雨に打たれて此^こ地に散る
そほふる雨の中なれど
^{うすすみ} 淡墨桜 今 ^{さか} 盛りなり
(宗博)